

った。特に発起人3名で苦勞して考えた会則案の「役員」の項は総会でずたずたになって、当初の面影すらとどめない姿になってしまった。当初の案では役員は運営委員のみで、会長や事務局長の職名はなかったのである。しかし、当日来賓で来て下さった奈良医大の吉本さん、阪大の田中さんからもっと責任体制をしっかりした方が良いと助言をいただいた。そうだ、そうだということになったのだが、私たちは全く予想もしていなかった事態にすっかり慌ててしまった。そんな私たちを見兼ねて、来賓の方たちも立場を離れて一緒に考えてくださった。出席していた私の病院の後の図書委員長が「あれはおかしかったねえ」と後々まで笑ったものである。

もう一つ、会費についても私たちは多くの病院に参加して欲しい一心で、先達の意見を無視して年2000円という弱気な案を出してしまった。この結果、協議会は設立後数年間に互るあの無惨な自転車操業的財政難に苦しむことになったのであ

る。

このようにして協議会は活動を開始したのであるが、入職2年目にして初代の事務局長の役を仰せつかった私は、理想には燃えていたものの公文書の書き方一つ知らなかった。知らぬが仏というけれど、この場合は正に無謀というしかない。山室さん、重富さん、当時の大阪通信病院の山口さんには本当にお世話になった。また、くじけそうになる私を「それやったら、いけますやん、やってみましょうよう」と楽天的に支えてくれた初期の幹事の方たち、何かとバックアップしてくださった各病院の管理者の方たちのことは15年経った今も決して忘れられない。

つくづくと振り返ってみると、こうした多くの理解者に恵まれ、協議会は幸せな出発をしたのだと思う。

協議会の存在が、今後も新しい担当者にとって、また病院図書室にとって頼もしい支えとなることを切に願っている。

多くの方々に支えられて

山室 真知子

(京都南病院図書室)

近畿病院図書室協議会の発祥の地といえば、さしずめ設立総会を開催し、初代の会長病院でもあった星ヶ丘厚生年金病院であろう。しかし私には、一面識もない病院図書室の司書5人が電話で互いの存在を確認しあって集まった、JR大阪駅コンコースにあるあの噴水が忘れられない。その場で病院図書室の会を作ろうということになり、発起人をきめて、そこから始まったからである。

私が病院図書室にきたのは昭和41年7月、その2年前、大学図書館を退職した頃にはすでに図書館間の組織がいくつもあり相互協力活動が活発に行われていた。当院の病院図書室は零からの出発であった。院内の各部所に分散されていた図書・雑誌を中央化して、やがて大学研究室の図書室程度のものになったが、サービス活動を始める段に

なってハタと行き詰まってしまった。「当院にない文献もとれますよ。」「文献調査もします。」と前宣伝よろしく利用者の先生方を喜ばせ、リクエストを受けたものの病院図書室が入りこむ組織は一つもなかった。「病院図書室？ 病院に図書室なんてあるのですか?」、つまり全然相手にしてもらえなかったのである。結局は地元の京大、京都府立医大の図書館に依存し、そこにない文献は他の大学を紹介してもらったが、ここでもまた「当図書館は日本医学図書館協会会員外には文献の提供はしませんので悪しからず」という返事をたびたび受けた。協会の「現行医学雑誌所在目録」を購入しても当時文献依頼に応えてもらえる大学は十指に満たなかった。

その頃、日本医学図書館協会から送られてきた機関誌「医学図書館」の見本誌に準会員の入会案

内が添付されていた。早速事務局に当院図書室の現況を説明したところ、「雑誌目録が出来れば入会できると思います」の返事に目の前が開けた。しかし目録の完成をまたずして準会員制度は廃止になった。

何としても病院図書室の組織がほしかった。組織がだめなら、せめて病院図書室の担当者同志の交流がもちたいと思い、京大医学図書館に京都の他の病院の様子を問合せてみたが、図書館があっても担当者がいないとの返事、病院に本を納入している書店に尋ねても図書は庶務、用度課に納めるので図書室はあるかどうか分からない、少なくとも担当者はいないとの返事にあきらめるしかなかった。

その後、京都市立病院図書室に重富さんがおられることを日本図書館協会全国大会の出席者名簿で知った。いつか必ずこの人に電話をしてみようと大切に記憶にとどめたのを覚えている。すぐ連絡しなかったのは、その頃私は図書室での患者サービスを始めようと、外国文献を集めて読むのに忙しくしていた時だったからである。

星ヶ丘厚生年金病院の首藤さんから“病院図書室の組織を作りませんか？”という最初の電話をもらった時、まず重富さんを思い出したことはいうまでもない。

大阪駅コンコースに集まった5人のうち、首藤、重富（京都市立病院）、山室（京都南病院）の3人が発起人として各自分担を決めて早速準備をはじめた。趣意書、会則などの草案作り、アンケートの項目作りと集計など殆ど家へ持ち帰っての仕事、それをもとにして3人集まって案を作成した。3人とも家庭もちで家族の協力も有難かった。もちろん準備資金などはない。丁度その頃コピー機が各病院に設置され始めた頃で、資料作りに試用期間中の無料サービスをよく利用させてもらった。以下は会報創刊号にある会設立の経過報告の

通りであるが、最初の出会いから2週間後には発起人の外5病院が参加して準備会を結成、約2カ月半で設立総会開催という超スピード、あのエネルギーはどこからでたのだろうか。それから15年、実に多くの方々の理解と援助で支えられてきた。

組織作りにズブの素人であった私達に、親身になって相談にのって下さった元奈良医大図書館の吉本瑞応氏、「京阪地区病院図書管理研究会」という名称を将来のことを考えて、「近畿病院図書室協議会」ではどうか？と提案されたのは確か吉本氏だったと思う。研修会の講師もよくお願いした。中野直先生（元彦根市立病院小児科部長）、50・51年度の幹事をされ、首藤さんと私をつれて会員拡充のために滋賀県の主な病院をまわって下さった。そのお蔭で現在滋賀県勢ともいべき熱心な会員の方々がおられる。中野先生に「女性3人の名前の趣意書を見たとき、お茶でも飲みながら図書室の話をする会かと思っていたら、だんだんすごいことをやりだした」といわれて苦笑した。

津田良成先生（日本医学図書館協会名誉顧問）、非常に忙しく活躍されておられたにも拘らず、当会のためにいつも快く時間をさいて援助していただいた。講師に、シンポジウムの座長に、その他にも随分先生のご好意に甘えてきた。そして「病院図書室マニュアル」の監修もして頂いている。朴木貞子さん（元北野病院司書）、協議会の結成をわがことのように喜んで私達の先輩としてご指導いただいた。時々弱気になる私達をいつも叱咤激励された。そして日本医学図書館協会、とくに近畿地区医学図書館協議会加盟館の方々、その他実に多くの方々から協力と励ましをどれだけ頂いたか分からない。

この15年間を振り返り、これらの方々に改めて心からお礼を述べたい。